

大正大学附属図書館蔵 『大方広仏華嚴經』 卷七（旧高山寺本）について

渡辺麻里子

On the Manuscript of Scroll VII of the *Buddhāvataṃsaka-sūtra* Chinese Translation
in the Taisho University Library

Watanabe Mariko

From the mark stamped on Scroll VII of the Chinese translation (made by Śikṣānanda 実叉難陀) of the *Buddhāvataṃsaka-sūtra*, housed now in the Taisho University Library, it can be seen that it was once in the possession of the Kōzanji Temple 高山寺. According to Okuda Isao 奥田勲, there are twelve manuscripts of the *Buddhāvataṃsaka-sūtra* Chinese translation in the Kōzanji Temple Collection.

The Taisho University manuscript has a colophon reading: 正安四年、朝玄 ‘year 4 of the Shōan era [i. e. 1302], Chōgen’, which suggests that it was copied at the Kōzanji Temple during the Kamakura period. The text seems to have been collated with various versions in 1230 and 1302–1303. If we check the relevant part of the *Kōzanji kyōzō tenseki monjo mokuroku* (Part Two) 高山寺経蔵典籍文書目録第二, we see that Scrolls IV to VII are indeed missing from the current Kōzanji collection. This further corroborates the fact that the provenance of the Taisho University manuscript is the Kōzanji Temple.

Let take a closer look at the relevant codicological data. The manuscript cover is brown paper decorated with a golden grass pattern and strewn with gold foil. There is no title on the cover page. The title is written on the inside: 大方広仏華嚴経普賢三昧品第三 卷七 新訳. Below the inner title page, we find written in black ink: 廿紙 ‘20 folios’. The manuscript, however, has only 11 folios, but this is because it has lost 9 folios (between folio 4 and the current folio 5).

The size of the cover is 26.6 cm in length and 21.7 cm in width, the whole paper is 26.6 cm in length and 455.4 cm in width. The folios have suffered some paper and insect damage, but the general condition is good. The manuscript appears to have been repaired at least twice so far.

The colophon tells us that Chōgen 朝玄 collated the manuscript at the Kozanji Temple on the fifth day of the third month of year 4 of the Shōan era (1302). It even adds that day was cloudy, with occasional rain. The content of the colophon is consistent with the format of the manuscript.

Some Chinese characters in the manuscript have noted the Japanese reading 振仮名 in *katakana* 片仮名 in black ink while the punctuation is written in red ink. Occasionally we also find supplementary notes. The number of characters per line is usually 17 characters, but some lines contain 18 characters or even 20 characters.

If we compare the manuscript with the TaishōCanon 大正大蔵経 text, we see that some of the former’s readings match with the Korean Canon edition 高麗版 while others with the Yuan Canon edition 元版. Furthermore, we find three variant readings not attested in the Taishō Canon critical apparatus. All this calls for further research.

大正大学附属図書館蔵『大方広仏華嚴經』卷七（旧高山寺本）について

渡辺麻里子

一 はじめに

大正大学附属図書館に、『大方広仏華嚴經』（零本）が所蔵されている。新訳「八十華嚴」の「普賢三昧品第三」の一巻である。「高山寺」の朱印が押され、「正安四年」朝玄による校合の奥書があることなどから、もと高山寺に所蔵されていた一本が、経路は不明ながら、大正大学の所蔵となったと知られるものである。

『華嚴經』は大乗を代表する経典の一つで、漢訳では、東晋の仏馱跋陀羅が訳した『華嚴經』六十卷本（六十華嚴、旧訳）と、唐の実叉難陀が訳した『華嚴經』八十卷本（八十華嚴、新訳）がある。梵語の題名は「仏の華飾り」と名づけられる広大な経」の意で、仏たちが無数に集まっている様子を描いた経典という意味とされる。また、今日仏陀が迷いを離れて成道したその悟りの内容をそのままに表明した経典であると言われる^①。

日本において『華嚴經』は、養老六年（七二二）十一月に、元明天皇の菩提のために『華嚴經』八十巻が書写された記録がある^②。また天平八年（七三

六）七月には、唐の道璿^{どうぜん}が華嚴の章疏を初めて将来したという。

『華嚴經』の講経は、天平十二年（七四〇）十月に、良弁の要請により、大安寺の審祥^{しんじょう}が東大寺の前身である金鐘寺^{こんしゆじ}において「六十華嚴」を講じたのが最初とされている。良弁はその法を伝え、東大寺は華嚴の根本道場となった。東大寺の大仏は、『華嚴經』（六十華嚴）の教主・盧舎那仏をかたどって造立され、日本の華嚴学は、とりわけ東大寺を中心として発展していくこととなる。

華嚴学は、東大寺の他、高山寺でも盛んに行われた。日本の華嚴学を考える時に、東大寺系と高山寺系に大別することがあるように、高山寺は日本の華嚴学において重要であることは言うまでもない^③。

高山寺（京都市右京区梅尾）は、創建は奈良時代に遡るともいわれる。建永元年（一二〇六）、後鳥羽上皇の院宣によって、明恵上人が、神護寺の別院であったその寺域を、華嚴宗興隆のために賜って再興した。寺名は『華嚴經』の「日出先照高山」の句にもとづくという。承久元年（一二一九）、金堂に本尊が安置され、さらに承久の乱後、次第に堂塔が整えられた。

高山寺所蔵の聖教典籍は、国宝の『鳥獸戯画』をはじめとして著名である。

多くの聖教が伝わり、長い間調査が行われてきた。^④『華嚴經』に限っても、旧訳・新訳ともに、十二種類の『華嚴經』の伝本が確認されている。

現在、大正大学に所蔵される『大方広仏華嚴經』卷七（零本）は、かつて高山寺に所蔵されていたが、寺外に流出した聖教の中の一巻と推定される。『高山寺』の朱印があり、また「正安四年／朝玄」と記す奥書などの情報から、高山寺の旧蔵本の一巻と判断される。本書が大正大学図書館に所蔵されていることはあまり学界で知られていないものと思われたため、本稿では、この『大方広仏華嚴經』卷第七（一巻）の紹介を行うこととする。

二 大正大学附属図書館蔵『大方広仏華嚴經』卷七の書誌情報

大正大学附属図書館蔵『大方広仏華嚴經』卷七（所蔵者整理番号、一八三・四／DK-K、以下大正大学本とする）は、「普賢三昧品第三」の一巻である。

初めに書誌情報から述べる。表紙は、茶色地の料紙に金泥の草模様と金箔散らしが施されている。見返は薄茶色無地の楮紙で、竹製の八双である。茶色と紺色で編み込まれた紐は、その新しさから、後補のものと思われる（写真1）。

外題はなく、端裏書に「「卷第七」とある（写真2）。「卷第七」の上部は、磨滅によるものか、判読できない。見返には、墨書などはない（写真3）。

内題は「大方広仏華嚴經普賢三昧品第三 卷七」とあり、内題下に「新訳」とある。また内題の脇下方に、「甘紙」と墨書する。巻頭には「高山寺」の朱印が押される。単郭長方の陽刻印で、縦四・七×横一・二厘の、著名な

朱印である（写真4）。尾題には「大方広仏華嚴經卷第七」とある（写真5）。

料紙は楮紙である。第一紙と第二紙は、緒紙素紙で裏打補修がしてあるが、現在の虫損はその裏打紙も含めたものとなっている。第三紙以降は、第一紙・第二紙の裏打紙とはまた別に、厚楮紙での裏打補修が行われている。

現存本は、料紙の糊離れはなく、つながった一巻となっているが、『華嚴經』の本文と比較すると、現在の第四紙と第五紙の間に、脱落が認められる（写真6）。写真からも、界線が合っていないことがわかる。冒頭に「甘紙」とあり、現状は十一紙となっていて一致しないが、『大正新修大蔵經』所収本と本文を比較すると、第四紙は、第一〇卷三四頁上段一七行まで、一八行以下、次の料紙に記されているはずの箇所が脱落している。大正大蔵經の行数から判断して、以下、九紙分の脱落があるものと思われる。^⑤大正大学本の第五紙の本文は、大正蔵一〇卷三七頁中段八行（偈の二行目）からの本文に一致している。この脱落を踏まえれば、冒頭に「甘紙」と記している記事と、この第七巻の紙数は一致するものと考えられる。

次に、寸法等を示す。

表紙は、縦二六・六×横二一・七厘。紐は、長さ五七・六厘、幅は〇・五厘である。見返は、縦二六・六×横二〇・〇厘。軸は濃茶色の木製、縦二八・〇厘、直径は〇・九厘である（写真7）。

本紙は、縦二六・六厘×横（全長）四五五・四厘となっている。各紙の横の寸法と行数は以下の通りである。

- 第一紙 二〇・四厘（九行）
- 第二紙 三三・二厘（一六行）

第三紙 五四・四糎（二七行）

第四紙 五四・四糎（二七行）

第五紙 五四・四糎（二七行）

（この間、九紙脱落）

第六紙 五四・七糎（二八行）

第七紙 五四・六糎（二八行）

第八紙 五四・六糎（二九行）

第九紙 五〇・六糎（二七行）

第一〇紙 五二・六糎（二五行、本文末+尾題）

第一一紙 一一・八糎（奥書）

第一二紙 一五・一糎（白紙・後補）

一行の字数を確認すると、基本的には一行一七字であるが、異なる行があることが確認できる。時折、一八〜一九字で記されている行がある他、五字（五言）の偈の箇所、五字×四句を一行に記し、二〇字（＋スペース）で記す行が見られる（写真8）。界線が薄墨で引かれていて、天界が二・六糎、地界が二・八糎、界高が二一・一糎、界幅が二・一糎となっている。

保存状態は良く、第三紙の冒頭に、二文字の欠損が見られるが（二行目一字目「普」、二行目一字目「浄」を欠く）、微細な虫損はあるものの、全体に判読は可能である。少なくとも二度の修復を経ており、第一紙・第二紙に見られる楮紙素紙の裏打補修と、第三紙以降に見られる、黄色がかった厚緒紙による裏打補修がなされているのが確認できる。

奥書には、次のように記す（写真9）。

正安四年^{寛正}三月五日、於高山寺西谷住房、切句
并交合等了

天陰雨時々降^云 朝玄

これによれば、正安四年（一三〇二）三月五日に、高山寺西谷の住房において、朝玄が切句し校合などを行ったという。またその日の天気は曇り、時々雨が降っている日であった、とのことである。

本書には、実際のところ、朱点による区切点が施され、墨書で校合が行われていて、奥書の記事と一致する。またそのほか、一部の文字に、朱で声点、墨書の片仮名で読み方（振り仮名）が付されている（写真10・11）。

現在の大正大学本は、全部で一二紙あるが、第二二紙は、現在の装丁をするために、軸とつながるために補った後補の新しい白紙（素紙）である。第一一紙から裏打した料紙で、第一一紙の本紙は、最後が上下を斜めに裁断していることから、もと軸に巻かれていた部分であることが推察され、料紙の紙質からみても、原装としては第一一紙が最後であったと考えられる。先述のように、第五紙と第六紙の間は、本文が脱落しており、その脱落分の分量から九紙分の脱落が考えられる。冒頭に「廿紙」と記していることから元は全廿紙であったことが推測されるが、現状の一一紙と、脱落分の九紙を合計すると、合計二〇紙となり、「廿紙」と記す墨書と符合する。

以上が、現在、大正大学附属図書館に所蔵されている『大方広仏華嚴経』巻七の書誌情報である。

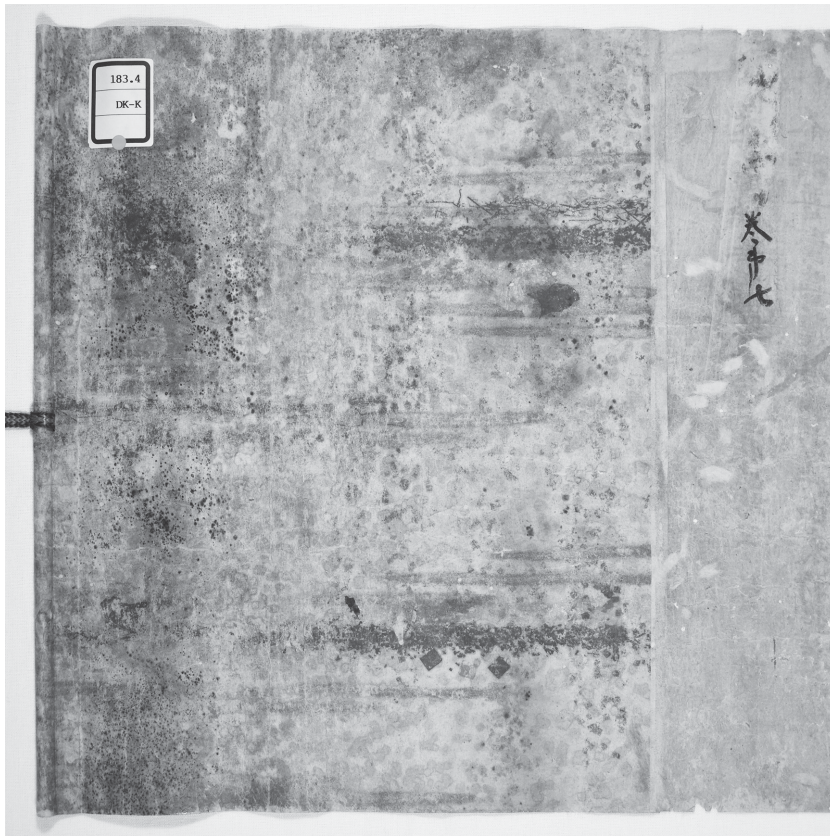


写真2 表紙・端裏書

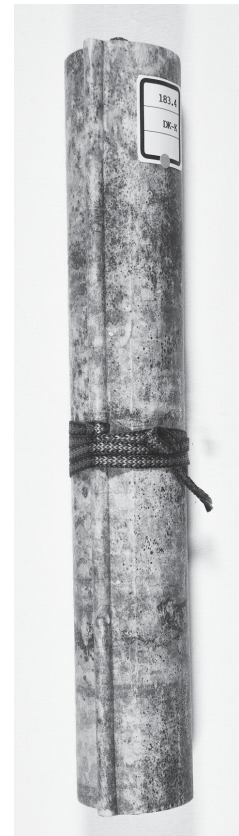


写真1 表紙・紐

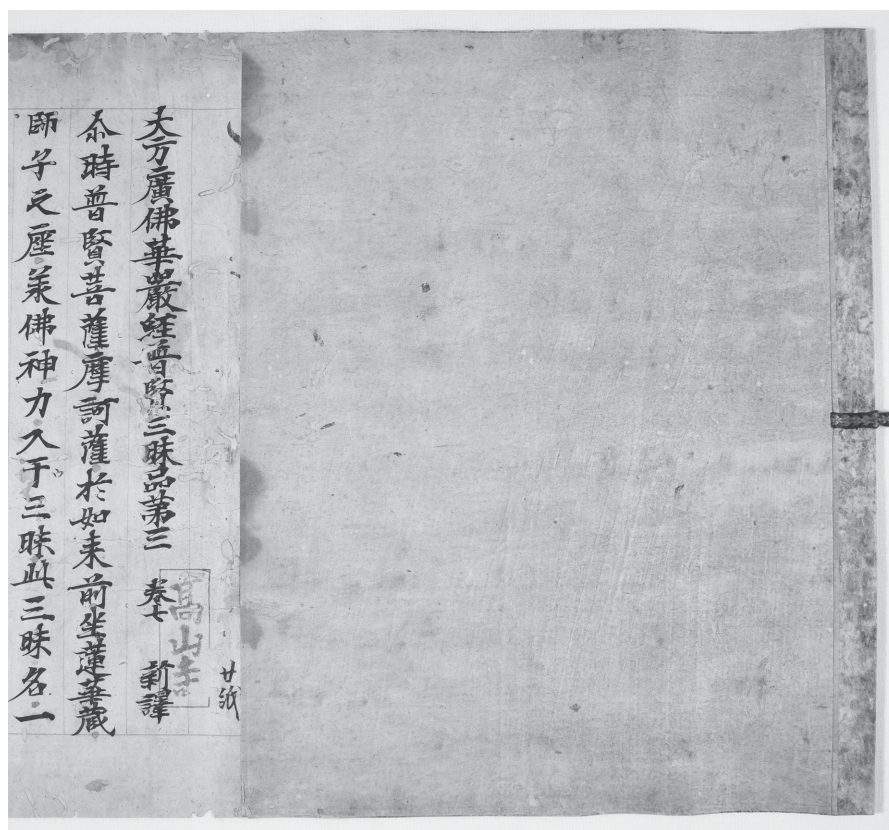


写真3 見返・内題

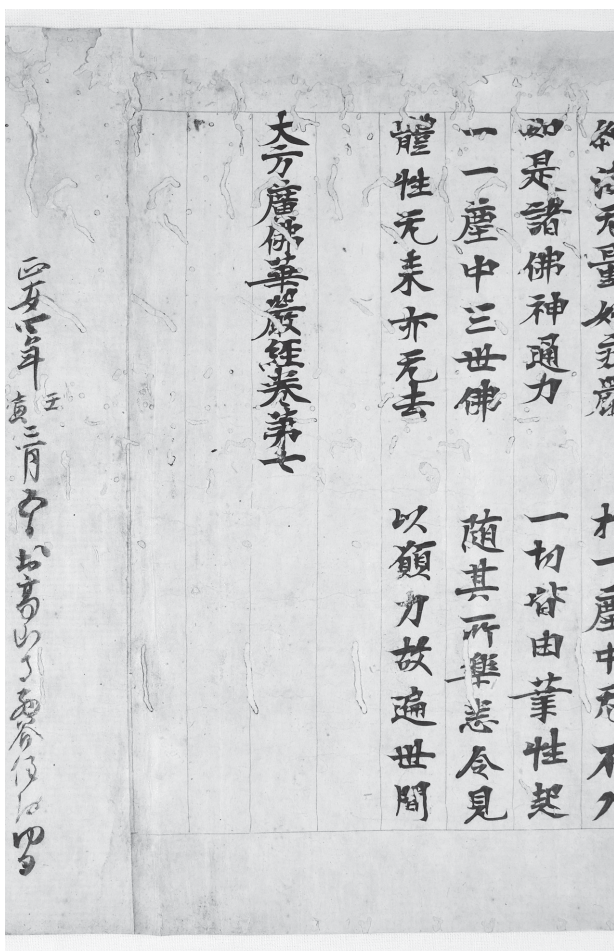


写真5 尾題

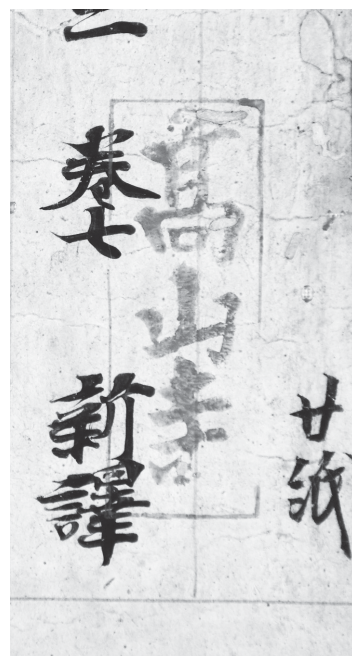


写真4 高山寺朱印



写真7 軸

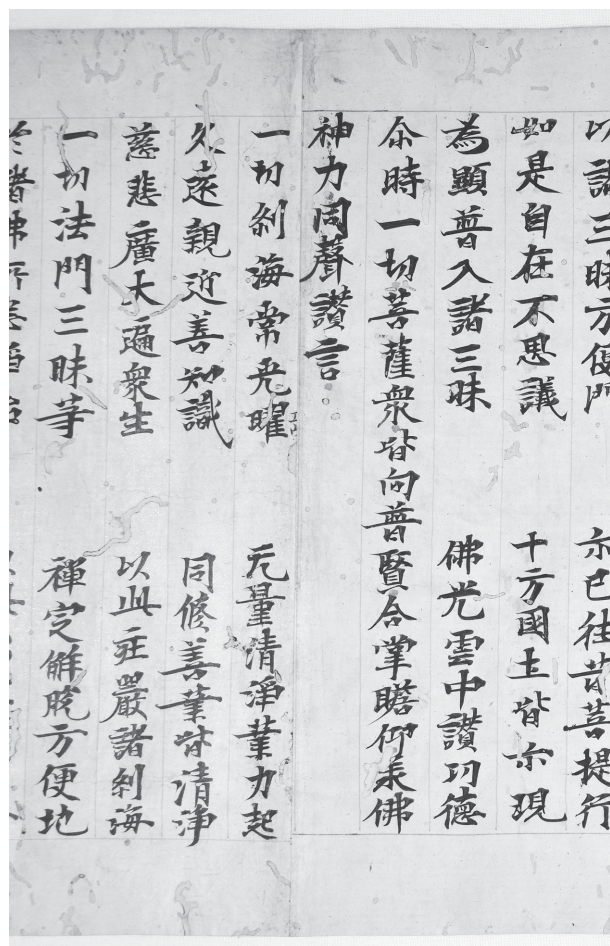


写真6 脱落箇所

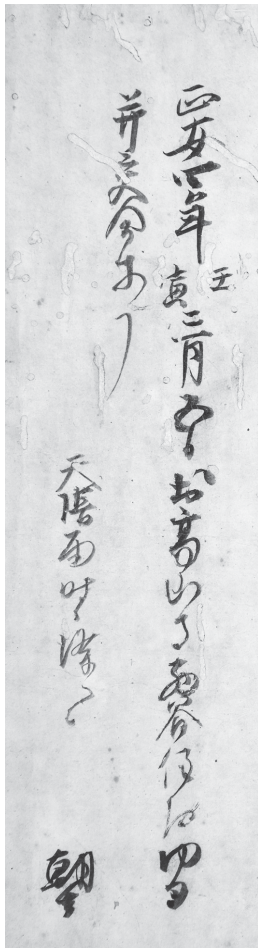


写真9 奥書

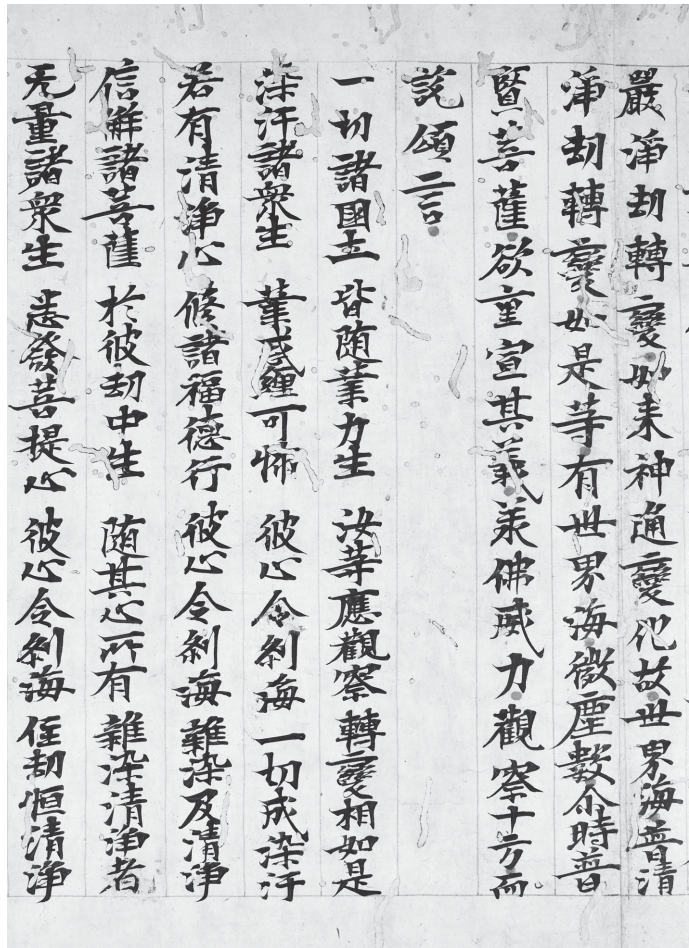


写真8 偈頌書寫箇所

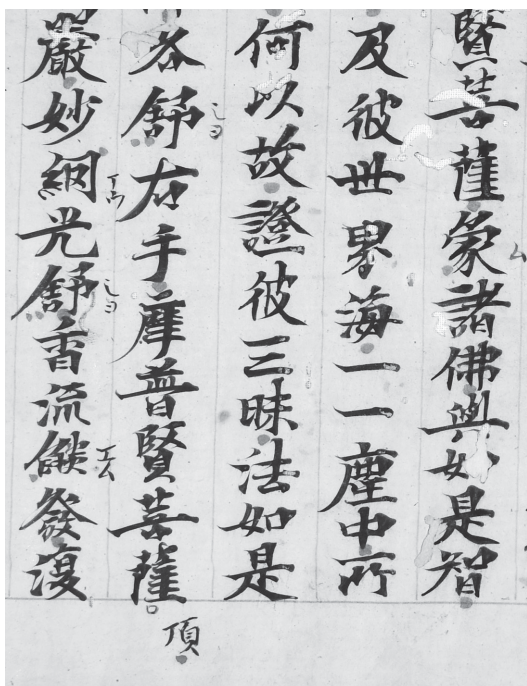


写真11 声点・振仮名

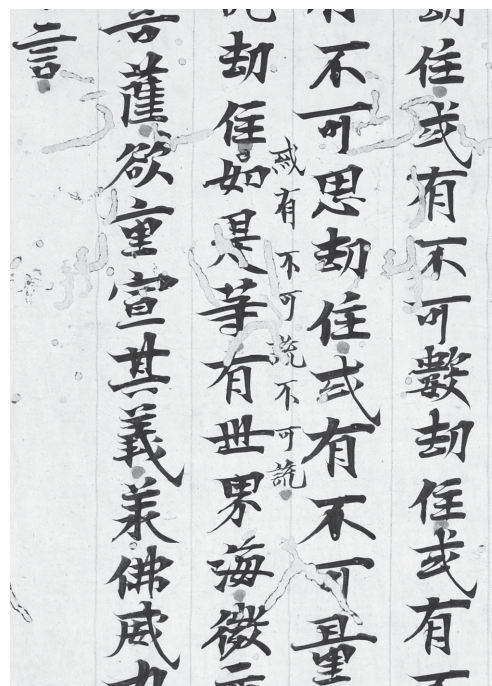


写真10 墨書校合

三 大正大学附属図書館蔵『大方広仏華嚴經』卷七の特徴

本書から確認できる特徴としては、(一) 声点と振仮名の書入、(二) 校合の注記と本文の系統の二点を指摘できる。以下、順に説明する。

(一) 声点と振仮名の書入

一部の文字について、墨書で振仮名(片仮名表記)を記し、朱で声点を付している。以下に、振仮名が付された文字を挙げる。「」は振仮名、() は朱点の位置と数を示す。

〔第一紙〕 一行 于〔ウ〕(左上に点一つ)

六行 漩〔セン〕(右上に点一つ)

靡〔ミ〕(左上に点一つ)

七行 包〔ハウ〕(右上に点一つ)

納〔ナウ〕(右下に点一つ)

八行 含〔カム〕(右上に点二つ)

〔第二紙〕 一行 容〔ヨウ〕(右上に点一つ)

〔第三紙〕 一四行 蒙〔ム〕(左下に点一つ)

一七行 舒〔シヨ〕(左下に点二つ)

一八行 網〔マウ〕(右上に点一つ)

舒〔シヨ〕(左下に点二つ)

〔第四紙〕

二行 宅〔タク〕(右下に点一つ)

一六行 歿〔モツ〕(右下に点一つ)

〔第五紙〕

二行 樂〔カク〕(右下に点二つ)

一一行 遺〔ユイ〕(左上に点一つ)

〔第六紙〕

二二行 己〔コ〕(朱点はナシ、振仮名のみ)

一行 曜〔エウ〕(左上に点一つ)

一五行 竭〔カツ〕(右下に点一つ)

二七行 樂〔ケウ〕(左下に点二つ)

權〔コン〕(右上に点二つ)

〔第七紙〕

一行 樂〔振仮名ナシ〕(左下に点二つ)

一四行 儼〔ケム〕(左下に点二つ)

〔第九紙〕

一二行 玕〔チン〕(右上に点一つ)

〔第一〇紙〕

五行 區〔ク〕(左上に点一つ)

一一行 迫〔ハク〕(右下に点一つ)

隘〔アイ〕(左下に点一つ)

一九行 央〔アウ〕(左下に点一つ)

以上のように、振仮名と声点の書入が確認できる。

(二) 校合の注記と本文の系統

次に、校合の注記について確認する。本文中、校合の注記が記されている

箇所は、以下の通りである。

〔第三紙〕 一二行 詞↓（見せ消ち）辞

一七行 菩薩（の下に）頂

〔第六紙〕 二五行 觀↓（見せ消ち）普

〔第七紙〕 一一行 出現↓「出」を見せ消ち、出現（の下に）觀^ト

二三行 劫住（の下に）或有不可説不可説

〔第一〇紙〕 二行 仏威力（の上に）承

以上のような校合による墨書の書入が行われている。これらの注記を、『大正新修大藏經』卷十所収の『大方広仏華嚴經』（八十華嚴、以下大正新修本）と比較してみることとする。

まず、第三紙一二行の「詞」であるが、大正大学本は、「詞」を見せ消ちで「辞」の注記を入れている。大正新修本（高麗版）は「辞」で、「三」（宋・元・明版）が「詞」とある（大正蔵一〇・三三頁中四行）。次に、第三紙一七行の「菩薩」の下に「頂」の字を書き込んである箇所は、大正新修本は本文が「菩薩頂」（大正蔵一〇・三三頁中一〇行）とあり、他本の注記はない。第六紙二五行の「觀」を見せ消ちで「普」とする箇所は、大正新修本は本文が「觀察」とあり、注記として「普觀」（宮内庁書陵部旧宋本）を記す（大正蔵一〇・三七頁下三行）。第七紙一一行の「皆出現」の「出」の文字を見せ消ちし、「出現」の下に「觀（+振仮名「ト」）」と記す箇所は、大正新修本は「皆現觀」とし（大正蔵一〇・三七頁下段一八行）、他本の校合注記は特にない。第七紙二三行「劫住」の下に「或有不可説不可説」を挿入する箇所は、大正

新修本では「劫住」とし、明版が「或有不可説不可説劫住」とすることを注記している（大正蔵一〇・三八頁上一行）。第一〇紙二行の「仏威力」の上に「承」と注記する箇所は、大正新修本は「承仏威力」とし、宮内庁書陵部旧宋本が「神力」であると注記する（大正一〇・三八頁一六行）。

以上の点からは、大正大学本の系統は、大正新修大藏經の高麗版とも、対校に用いている宋版・元版の本文とも、一致しないことが確認できる。

その他、大正大学本の本文を、『大正新修大藏經』卷十所収の『大方広仏華嚴經』（八十華嚴）と校合すると、上記以外の箇所にも違いが指摘できる。以下、煩瑣なものになるが、一々に列挙しておきたい。合わせて、大正大藏經で校合の指摘がある箇所についても触れておく。

なお、「毘盧遮那」の「毗」（大正大学本）と「毘」（大正大藏經）、「无」（大正大学本）と「無」（大正大藏經）、「汙」（大正大学本）と「汚」（大正大藏經）は、「弥」（大正大学本）と「珍」（大正大藏經）などは、表記の違いとして、指摘から外している。

以下、大正大藏經の本文に添って、挙げていく。

三三頁上一行「漩」↓校異「旋」（宋版・宮内庁書陵部旧宋本）

……大正大学本「漩」（第一紙六行）

三三頁上一〇行「現」↓校異「見」（明版）

……大正大学本「現」（第二紙六行）

三三頁中九行「而起時」↓校異「而」ナシ（宋・元・明版、宮内庁書陵部旧宋版）

……大正大学本「而」ナシ（第三紙二五行）

三三頁下六行「耀」↓校異「曜」（宋・元・明版、宮内庁書陵部旧宋版）

……大正大学本「曜」(第四紙二四行)
 三四頁上一一行「震」↓校異の指摘ナシ
 ……大正大学本「振」(第五紙二二行)
 三七頁中八行「耀」↓校異の指摘ナシ
 ……大正大学本「曜」(第六紙二四行)
 三八頁中一七行「見」↓校異「者」(元版、明版)
 ……大正大学本「者」(第九紙七行)
 三八頁下一五行「数」↓校異「無差別」(元版、明版、宮内庁書陵部旧宋版)
 ……大正大学本「数」(第一〇紙一行)
 三八頁下二三行「遶」↓校異の指摘ナシ
 ……大正大学本「繞」(第一〇紙一〇行)

以上を見ると、大正新修本で校異の指摘がある箇所について、大正大学本は、大正大藏経高麗版に一致する箇所もあるが、対校している元版の方にある箇所もあり、いずれとも全て一致するものはない。また大正大藏経に異同の指摘がない箇所について、本文の異同が確認できる箇所が三箇所ある点は重要であろう。^⑥ 大正大学本(旧高山寺本)の本文の系統については、他の古写経と比較するなど、さらなる検討を要する。

四 現在の高山寺所蔵『大方広仏華嚴経』との関係

高山寺所蔵『大方広仏華嚴経』の現存状況については、奥田勲「高山寺現蔵大方広仏華嚴経一覽稿」^⑦に詳しい。高山寺経蔵に伝蔵される『大方広仏華

嚴経』の古写本十二種について、その概略と現存巻の函架番号が一覧できるようにになっている。奥田氏によると、高山寺経蔵に所蔵される『大方広仏華嚴経』の古写本十二種とは以下のものである。

- ① 建久七年(一一九六) 校合本
- ② 建久七年(一九九六) 校合本
- ③ 正治二年(一二〇〇) 校合本
- ④ 建暦元年(一二一一) 明恵勸進経
- ⑤ 承久二年(一二二〇) 写本
- ⑥ 貞応元年(一二二二) 写本
- ⑦ 貞応二年(一二二三) 写本
- ⑧ 嘉禄元年(一二二五) 写本
- ⑨ 安貞二年(一二二八) 校合本
- ⑩ 寛喜二年(一二三〇) 校合本
- ⑪ 貞永元年(一二三二) 写本
- ⑫ 建長二年(一二五〇) 校合本

この中で、大正大学本がいずれなのかを考えると、⑩の「寛喜二年(一二三〇)校合本」の一群に該当するものと思われる。奥田氏の解説によれば、⑩の本は、「新訳、卷子本、鎌倉初期写、寛喜二年、高山寺に於いて、円弁・了弁・長真・弁清・慈弁ら校合、正安二年(一二三〇)〜嘉元元年(一二三三)高山寺に於いて、朝玄校合、」と記されている。大正大学本の奥書には、「寛喜二年、高山寺に於いて書写」に関する記事はないが、その他の

点、「正安四年、朝玄」による校合などの情報が一致している。奥田氏が示す高山寺目録との対照一覧によれば、『大方広仏華嚴經』巻七は現存することと、「IV・七23」つまり、「高山寺聖教類第四部」の第七函・23番に記載するとする。^⑧ただし「高山寺聖教類第四部」の第七函・23番を見ると、次のように記される。

23大方広仏華嚴經卷第八（新訳華嚴經）一卷

○体裁等第21号二同ジ、

（端裏書）「六月廿四日」

（奥書）（別筆）「一交畢」

正安四年^寅三月五日於高山寺住房重交合／等了

朝玄

この記事からは、高山寺に現存するのは巻八であって、巻七の所蔵ではないと考えられるのである。ちなみに「高山寺聖教類第四部」第七函を見ると、巻三の次は巻八となっていて、巻四・七の所在はこの函中には確認できないこととなっている。^⑨

体裁については、「○体裁等第21号二同ジ」とあるため、第21号を見ると、次のように記載される。

○鎌倉後期写、卷子本、高山寺朱印、墨界、朱点（声

点、鎌倉後期）、墨点（仮名、字音、正安四年）

これらの特徴は、すべて現在の大正大学本と一致する。「高山寺」の朱印があること、新訳であること、卷子本であること、正安四年、高山寺西谷房において、「朝玄」による書写校合であること、墨界があり、朱点の声点があること、墨書の仮名や字音を記した書人があることなど、「体裁」として記される特徴が全て合致する。

また大正大学本の奥書には、「天陰雨時々降^云」と天候を記す特徴的な記事がある。この点についても、『高山寺経藏典籍文書目録』によって、同じ正安四年の奥書を見ると、巻十三に「于時天陰云云 朝玄」という、同じ朝玄による奥書で天候を記入しているものもあって、これもまた共通していることが確認できる。

現存本との関係で言えば、現存本の目録である高山寺典籍文書綜合調査団『高山寺経藏典籍文書目録』で確認すると、この正安四年朝玄校合の『大方広仏華嚴經』（八十華嚴）の巻第七は欠本となっている。大正大学本は、この「巻第七」に相当するものと考えられるのである。

以上のことから、現在の大正大学附属図書館に所蔵されている『大方広仏華嚴經』巻七は、かつて高山寺の所蔵であったが、高山寺典籍文書綜合調査団が調査する以前の段階で、いつの時代か不明ながら高山寺から出て、その後の経路も不明ながら、現在、大正大学附属図書館に所蔵されたものと考えられるのである。

五 おわりに

本稿では、高山寺の旧蔵本と判断される『大方広仏華嚴經』（八十華嚴）の

一卷、正安四年朝玄の校合本のうちの巻七（卷子本一卷）が、大正大学附属図書館に所蔵されていることについて報告した。少なくとも二度の補修を経たであろう現在の経巻は、糊離れもなく、頭尾揃っているように見えるが、検証すると第四紙と第五紙の間には、九紙の脱落があることがわかる。所々に朱の声点があり、墨書の振仮名がなされる。また墨書（一部朱書）による校合の書入が見られる。本文は、大正新修大蔵経本文やその校異と比較した結果、高麗版・宋版・元版・明版とも、全て一致するものはないこと、また別に、数箇所異なることが確認できた。

高山寺に限らず、かつて学問寺であり多くの聖教を有した寺院の聖教は、長い歴史の間で少なからず流出し、現在、国内外の様々な場所で発見されている。稿者もこれまで、様々な調査先で、思いがけず、著名な寺院の旧蔵本を手にすることがしばしばあった。旧蔵者から現蔵者までの聖教の経路をたどれる場合もあり、それは時に、日本の様々な歴史を負っていることが確認できることもあった。

本稿は、経路もわからない零本一卷のみの報告に過ぎない。ただし、厳しい歴史を乗り越えて現在に受け継がれた現存聖教の意義を検討していくためには、こうした一断片の情報を積み上げていくことが必要なのだと考えている。

注

(1) 『華嚴經』については、鎌田茂雄「華嚴学の典籍および研究文献」（『華嚴思想』法藏館、一九六〇年）、鎌田茂雄『華嚴の思想』（講談社学術文庫、講談社、一九八八年）、木村清孝『華嚴經を読む』（NHKライブラリー、日本放送出版協

会、一九九七年）、竹村牧男『華嚴とは何か』（春秋社、二〇〇四年）、『仏書解説大辞典』、『岩波仏教辞典 第二版』、『大蔵経全解説大事典』などを参照した。

(2) 『華嚴經』の書写については、栄原永遠男「写経から『華嚴經』関係經典の普及を考える」（龍谷大学仏教学叢書⑤『華嚴——無礙なる世界を生きる——』自照社出版、二〇一六年）などを参照した。

(3) 高山寺については、『明恵上人と高山寺』（明恵上人と高山寺編集委員会編、同朋社出版、一九八一年）、土屋貴裕『高山寺の美術——明恵上人と鳥獣戯画ゆかりの寺——』（吉川弘文館、二〇二〇年）、赤尾栄慶『高山寺の美術』（『華嚴』前掲注2）などを参照した。

(4) 高山寺の聖教は、築島裕代表、高山寺典籍文書総合調査団によって調査が行われ、調査報告書および目録が刊行されている。

(5) 本文と行数を単純に数えると、九紙の脱落とするには大正蔵経本が一〇行ほど多く一致しないのだが、大正蔵経本三六頁下段の五言の偈について、大正大学本の第十紙において、五字（五言）の偈を四句一行に記していることを鑑み、その方法と同様に五言の偈を記しているものと考えれば、行数も符合し、九紙分の脱落と判断することが可能であろう。

(6) 大正大学本は、朱書の句点が付されるが、大正蔵経本と、句点の違いも若干見られる。例えば、大正蔵経三八頁上二七行「世界海。成染汚劫転変」↓「世界海成。染汚劫転変」（大正大学本）、大正蔵経三八頁上二八行「世界海。成染汚劫転変」↓「世界海成。染汚劫転変」（大正大学本）、大正蔵経三八頁上二九行「世界海。成染汚劫転変」↓「世界海成。染汚劫転変」（大正大学本）、大正蔵経三八頁中三行「世界海。無量」↓「世界海無量。」（大正大学本）などである。

(7) 奥田勲「高山寺現蔵大方広仏華嚴經一覽稿」（『昭和六十年高山寺典籍文書総合調査団 研究報告論集』築島裕代表、一九八六年）による。

(8) 奥田勲「高山寺現蔵大方広仏華嚴經一覽稿」（前掲注（7））によれば、正安四年の朝玄校合の奥書を持つ⑩寛喜二年（一二三〇）校合本は、卷二・三・五・七・八・十一・十二・十三・十九・二十（以下略）が現存すると記される。そこ

で高山寺典籍文書綜合調査団『高山寺経蔵典籍文書目録』と照合すると、卷二・三・五・十一・十二・十三・十九・二十は、卷数と内容が一致するが、卷七・八は、目録の記事と合わない。それはさらに検討すると卷八と卷九とするのが正しいと思われる。奥田氏らの調査時に卷七を確認したが、その後寺外に出てしまったのではなく、奥田氏の記す「卷七、卷八」は、目録に記される「卷八、卷九」のことであり、卷七は、調査時には確認できなかったものと考えられるのである。つまり現在の高山寺経蔵に、正安四年朝玄校合本の新訳（八十華嚴）卷七は存在せず、現在の大正大学図書館蔵本がそれに該当するものと思われる。また現存本には、表紙に函番号が記されているようだが、現在の大正大学本には函番号の記入は見られないため、かつて高山寺において函番号を記す整理をした段階では、すでに高山寺には無かったものとも考えられる。

（9） 高山寺典籍文書綜合調査団『高山寺経蔵典籍文書目録第二（高山寺資料叢書第五冊）』（東京大学出版会、一九七五年）四四頁下段による。

（付記）

貴重な資料の閲覧と掲載を御許可下さいました大正大学附属図書館に、心より御礼申し上げます。